

第31回長崎大学における感染症研究拠点整備に関する 地域連絡協議会議事要旨

- 1 日時 令和2年8月25日(火) 17:30～19:30
- 2 場所 長崎大学グローバル教育・学生支援棟 G-38 講義室(1階)
- 3 出席者数 28名 調(議長)、山下(副議長)、石田、梶村(高谷副会長代理出席)、久米、田中、道津、内藤、松尾、江頭、神田、寺井、原、藤原、泉川、加藤、福崎、宮崎、森崎、吉田、伊藤(川添総括課長補佐代理出席)、濱口、安田、南保、深尾、中嶋、信濃、森田の各委員
- 4 欠席者 なし
- 5 オブザーバー
岩崎容子(文部科学省研究振興局先端医科学研究企画官)
- 6 事務局(長崎大学)
佐々木敬一(感染症共同研究拠点総務部門担当課長)、岡野公嘉(施設部長)、安藤豊幸(施設部施設企画課長)、中村拓郎(施設部施設整備課長)

7 議事

議事に先立ち、前回同様、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、3密を避けるため、一部の委員は自宅等からオンラインで参加すること、報道機関及び一般の方は別会場で傍聴すること、報道機関による撮影は冒頭のみ許可すること、委員からのご意見も踏まえ会議時間を通常より30分短縮予定であることなどの説明があった後、追加配付した「参考資料1 BSL-4 Report (Vol. 1)」について説明があった。説明の大略は次のとおり。(深尾委員) これまで本協議会の報告会を何回か開催したが、コロナ禍の中で集まって報告会を開催することは適切でないため、BSL-4 施設の工事の進捗状況等を地域の皆様に情報提供する機会をぜひ作りたいたいと思って準備したものである。本日の協議会で説明し、今月27日から、坂本キャンパス周辺の6自治会の全世帯に配布させていただく予定である。発行頻度は2カ月に1回ぐらいを考えており、協議会の内容のうち特に重要であると思われる議論を、Q&Aや大学からのご報告事項等という形で紹介したいと思っている。長時間にわたる熱い議論の内容を全て盛り込むのは難しいが、議論の詳細な内容については大学のホームページに從來から掲載している議事要旨で確認できるようにする。表紙にホームページのQRコードやフリーダイヤル、ファックス番号を掲載している。大学の取組に関して疑問、質問、意見等がある場合は、こういうものを利用して大学に要望をお寄せいただきたい。こういうことを積み重ね、地域の皆様に情報をお伝えし、住民の皆様の気持ちに寄り添いながら計画を進めていきたい。

引き続き、議長から、本日の議事について、(1)委員からの質問・意見への回答については前回時間が足りず議論ができなかった質問等及び8月4日までに頂いた新規の質問等への回答を、(2)安全管理に関する検討状況については第2弾のビデオ上映を予定している旨の説明があった。

(1) 委員からの質問・意見への回答について

前回、時間がなくて積み残しとなった前回の資料5-2の(5)神田京子委員提出の質問について、大略次のとおり質疑応答が行われた。

⑤神田京子委員提出

(中嶋委員) 前回の神田委員からの意見は、マニュアル等について、出来上がったものを見せてもらうのではなく住民の意見を聞きながら一緒に進め、リスクアセスメントの結果をどのように反映するのかについても説明して欲しいという提案だったと思う。今後の検討の進め方として、ご提案を参考にしながら、例えば具体的な実験者の情報、実験内容の報告、実験動物、汚染物、実験スーツのことなどについて、どのような対応を考えているのか大学から一つひとつ具体的に紹介した上で、リスクアセスメントの結果をどのように反映したか説明し、どのようなマネジメントを行うべきか意見交換するような方法を提案したい。

(神田委員) ①については規則へ反映する事項等を既に紹介しているので、今後まとめた上で紹介するという回答で、②から④については、今後順を追って一つひとつ協議会で紹介したいという回答だった。②から④についても169項目の中に重複しているものが相当数ある。3年前、本協議会にきちんとした連絡がないまま基本構想の冊子が作られ、協議会での話は何だったのかと疑問の声が上がったこともあった。今回も協議会で一切話し合いをしないで大学だけで検討し作成したものが出てきたら困ったことになると思い、②から④に書いてある細かいことを含め、169項目の中に出てくる事項について、この協議会でできるだけ話し合いを行い、意見を反映したものを作ってもらいたいという趣旨である。全ての項目を全部まとめて検討することはできないので、中嶋委員から提案があったように項目ごとに少しずつ取り上げてこの場で話し合いをして欲しい。

(道津委員) こういう規則で、こういうふうにしてしっかり実施しますと言うだけでは満足できない。例えば、第28回会議の資料5の「長崎大学感染症共同研究拠点実験棟の運用に係る規則等の策定について」の中に、「実験室内での実験者の感染に関する規則への反映事項」とあり、「1. 起こさないための対策」として「入室者の心身状況に関する健康診断の実施（病気の届出、健康管理）」等の項目だけが書いてあり、これでは納得できないと言ったと思うが、具体的にどういうチェックをするのか。人はミスを起こすので入室時が一番のポイントだと思う。例えば、アルコール、薬物、精神状態、健康状態等を必ずチェックするとか、高齢者は白内障や緑内障等の兆候をいち早く見つけて入室させないといった、事故を起こさないための具体的な対策が大事だと思う。自己申告では駄目だと思うので、以前も提案したが、リタイヤした人でもいいので健康診断ができるドクターが必要ではないのか。そういうことをきちんと分かりやすく示して欲しいというのが住民からの要望であり、世界最高水準の施設で、事故を起こさないためには必要なことだと思う。

(調議長) 個別の内容については検討中であり、検討の過程の中で情報を提示し、ご意見を頂きたい。

(山下副議長) お願いであるが、以前の資料等を使って質問等を行う時には事前に大学に連絡し、会議の場で資料を閲覧できるようにお願いしたい。

(道津委員) 基本構想の中に、今後は大学にバイオセーフティ管理監を置く、学内外の有識者で構成する研究・施設利用審査委員会（仮称）を置くと書いてある。この委員会ではデュアルユースにならないように研究者のバックグラウンド、技術的能力や、防衛装備庁から研究費をもらっていないかなどを見極めたりするのか。この委員会は設置しないことになったのか。

(中嶋委員) 資料5はこの規則をどのような内容のものにするか概要を説明する趣旨で作ったものである。細かいところまでは記載していないがバイオセーフティ管理監を置くことはこの規則の中に規定する予定であり、委員会についても名前は違うが設置

予定である。

(道津委員) バイオセーフティ管理監とは別に委員会を設置して実験の申請等についてチェックするという認識でよいか。

(中嶋委員) そういうものは必要だということで、設置する方向で検討している。

(調議長) 詳細は決まっていないが、研究計画の内容を審査する組織は必要であるという認識で作り込んでいくことになると思う。研究費の受入れについては、研究者個人が手続きするわけではなく大学として受入れの手続きをすることになり、防衛装備庁からの予算については長崎大学としては受け入れないと明言しているの、仮に黙って申請し採択された人がいても、その予算は使えない仕組みになっており、委員会でもチェックし事務方も受け入れないという二重、三重の仕組みになっている。

(道津委員) 学内だけではなく、共同研究でBSL-4施設に学外から来る研究者についてもきちんとチェックするように規程等に一文盛り込むべきであると前回提案した。セキュリティ上、大切な部分になると思う。

(神田委員) 施設の安全と運営管理のことについては、協議会の意見を聞きながら話し合っていくということであったが、来年夏の施設が出来上がるまでには作って欲しい。今後、少しずつ話をしていく必要があると思うが、次回からやってくれるのか。話し合いの開始時期と終了予定時期について教えて欲しい。

(中嶋委員) 色々なリスクアセスメントについて、具体的なことを一つひとつ詰めているところである。その延長として、次回以降、実験者のこと、廃棄物のことなど二つ三つずつ説明し意見を頂くような形を取ればよいと思っている。来年夏には施設が竣工し建物は出来上がる予定であるが、そこからすぐに実験を始めるわけではなく、機材の搬入等を数カ月かけて行い、機材の搬入等が終了した後に、作成した規則の原案できちんと運用できるか、実際の施設を使って確認する予定である。したがって、応分の年月が必要であるということは以前から説明してきたところであり、規則のあらまは来年の竣工までに作成し、竣工後きちんと運用できるか確認し完成させたいと考えている。

(神田委員) 予定のままで終わらないで実行して欲しい。出来てしまってもう稼働しているということがないように、ある程度の期限を切って達成して欲しい。そのための努力であれば話し合いは幾らでもできると思う。やり方は、全員がここで集まらなくてもテレワークや文書のやりとりなどでもできると思うので、知恵を絞って欲しい。言葉だけの住民への寄り添いではなく、最高水準のものになるように、気持ちを酌んで、ぜひ検討していただけるように願っている。

(高谷代理) 先週は傍聴した。工事の進捗状況の説明等はあったが安全のためのソフト面の説明は全然なかった。工事の説明も大事だと思うが、それと同時に安全のための対策はここまで進んでいるという説明がなかったのは傍聴していて非常に残念に思った。いつも出席する立場ではなく非常に勝手ではあるが、稼働までには安全のためのソフト面がきちんと出来上がっていることが住民にとって一番の安心だと思うので、先ほど神田委員から要望があった双方向の話し合いを月1回行う、もしくは例えば専門部会みたいなものを立ち上げるという方法を提案する。やり方を考えないと時間だけが過ぎていく。

(調議長) 169の項目については、以前大きな紙を作り1個1個説明を行った。そういう経験も踏まえて、今のご提案については分科会にするか、テレワークにするか、資料のやりとりにするか検討したい。どうやってリスクを乗り越えていくかが一番肝の議論であるという認識については同じである。繰り返しになるが、竣工までに粗々な

ものを作り、そこから厚生労働省とのやりとりが1年になるか、2年になるかは分からないし、その過程で運営方法が変わることも想定しないとイケないかもしれない。そういった点や、169の議論は二回目であることも含めて、どこまで提示できるか分からないがそういう時間軸の中で検討していくことになる。

(神田委員) ずっと一緒に話し合ってきたので、前向きなものができ、住民の不安をなくすような実のあるものになればと思っている。

引き続き、第31回の資料5-4の質問について、大略次のとおり質疑応答が行われた。

① 梶村龍太・道津靖子・神田京子委員提出

(高谷代理) BSL-4施設の建設が進む中、新型コロナウイルス感染症が全国的に、世界的にも拡大し、住民の不安が非常に気になり住民アンケートをした方がよいのではないかということになった。それぞれの生活がある中で本当に大変であったが、アンケートを取りまとめ、最後にアンケートの結果、住民の意見を踏まえた上で要望書を作成した。住民としては今後この地域で安心して暮らしていくための根拠や拠り所が必要であるが、これまであまり議論されなかったので、竣工までに時間がない中で要望するものである。この要望書については、手前味噌かもしれないが、これまでの協議会の中で最も重要な意見書だと思う。私も関わったが3名の委員やその他多くの自治会の方が協力したアンケートである。近隣住民と長崎大学との間でこのBSL-4施設計画について議論するという本協議会の趣旨にまさに合致するものであるので、真摯に受け止めていただいで議論を進めて欲しい。個別の意見を見てもらえば分かるが、計画の白紙撤回という声も根強くある。その気持ちは分かるが、そうすると、ここでの議論が現実的なものではなくなってしまうので、現実的な問題解決のための手段を提案している。そういった意味でも、今回の要望書を今後の議論に反映して欲しい。

(道津委員) アンケートを実施した理由としては、住民の忌憚のない意見を聞くべきだということで、何年も前からずっと住民アンケートをお願いしてきた。最初は、周辺住民や周辺の13自治会で、市議会に対し、住民の合意を得てから着工するよう大学に求めるように陳情した。協議会では市でもいいし、大学でもいいので、とにかくアンケートを取って住民の声を聞いて合意を得る、理解を得ることを着工の必須条件として、それを取らない限り着工はできないのではないかとずっと言ってきたが、残念ながら、2019年の1月に着工してしまった。住民の不安は置き去りにされたままではないかと思い、その後も大学に、賛成、反対のアンケートでなくてもいいので住民の不安に寄り添うようなアンケートを実施して欲しいと、個別に山里中央自治会と平野町山里自治会で大学と4回ぐらい協議をしたが受け入れてもえなかったのはすごく残念である。しかし、工事はどんどん進み出来上がってきており、新型コロナウイルスによる住民の意識の変化も含め、住民の意見を聞くアンケートを取るのは必要不可欠ということで今回実施したものである。住民はすごく協力的で、色々な疑問や不安などを書いているのでぜひ読んで欲しい。図表の説明は神田委員からお願いしたい。

(藤原委員) 住民アンケートということで注目して見ているが、がっかりした。アンケートをされた努力は分かるが回答数が約半分と非常に少ない。また、意見書は非常に抽象的で、年代も性別も書いていないし、同じような意見がずらっと並んでいる。本当に住民の方の意見なのかと思うような内容である。高齢者もいれば若者もいるので年代層は非常に参考になる。BSL-4施設に関心があれば圧倒的に回答数は多いはずなのに、約50%ということで住民は本当に関心を持っているのか非常に疑問に感じた。

このアンケートはどのくらいの期間で、どういう内容で、どれだけのスタッフが実施したのか教えて欲しい。

(神田委員) アンケートは6月に実施し、529枚配布して277人から回答を頂き回答率は52.4%であった。アンケートで90%の回答があることはほとんどない。今回、性別や年齢を書いてもらわなかった理由は、特にBSL-4に関しては自分の声を表に出すのを不安に思ったり、何に使われるか分からないという気持ちを持ったりしている方も多かったからで、賛成、反対にかかわらず、この施設を造ることについて、コロナの影響もあって、どういうことを住民が感じているのかということ、右にも左にもどちらにも行かない、すごく平等な質問をしたと思っている。アンケートは梶村委員、道津委員、高谷副会長、私の4人が主導して行った。もちろん全員の方から回答があるのが望ましいが、回答があった中でのデータであり、これだけの数の住民しか思っていないということではなく傾向が分かる。例えば、9ページの意識の変化のグラフでは、賛成から反対に変わったのか、反対から賛成に変わったのかの理由は分からない。2以降で、施設に期待していること、施設に対する疑問、施設の建設に不安があるか、大学に要望することと具体的な質問をした。圧倒的に不安な気持ちを持っている人が多いが、薬やワクチンの開発、技術者の育成、経済効果など大学や市が説明していることを認めている人も多くいる。こういう数字が出たからといって、全て反対して施設を造るなどと言っているわけではないことを理解して欲しい。3の施設に対する疑問については、あるが97.3%、ないが2.2%、わからないが0.5%と疑問が解決されていないという気持ちの人が多くいる。4の施設の建設に不安があるかは心の問題で、ウイルスの漏洩、感染した動物の逸走、テロの発生、高齢者や幼い子供が心配の不安がある人が94.6%で、安全な施設だと思う人や大学の説明がよく理解できた人もいる。5の大学に要望することもたくさんあり、こういうことをクリアした上できちんとした施設になって欲しいというお願いで、大学に期待しているところもかなりあると思う。アンケートは、例えば100人に質問して100人が回答するものではないのでそこは理解して欲しい。意見については書いてもらったものを全部書いた。割愛したり、同じようなものは書かなかったりすると住民の声が通らないので、せっかく書いてくれた住民の気持ちをストレートに大学にお伝えしたので、気持ちを酌んで施設を造って欲しい。こういうことをするのは最初で最後であり、絶対反対ということではない。これだけの労力を要して提出したのでこのとおりにしないといけないう気持ちは毛頭ない。ただただ、施設がどんどん出来ていることに対する住民の不安が大きかったので、今これをする必要があるのではないかということを実施したものであることを理解して欲しい。

(藤原委員) 理解できない。

(神田委員) それはそれで藤原委員の考えなので結構である。それぞれの考えがあり、私たちはこのような気持ちでやったということである。

(原委員) 4人で主導してアンケートを実施したということであるが、二つの自治会はおそらく総会か何かを経てこの要望書を決議されたと思うが、あくまでも団体から大学に提出された要望書であり、関わった3名が協議会の委員ということで貴重な報告として真摯に受け止めるが、この内容について長時間、本協議会の場で取り上げるのは如何なものかと思う。

(内藤委員) 自治会は自主的な運営でやっている。自治会の中には数々の意見があり統一すべきではない。アンケートは意見を聞くにはふさわしくないと思うので、やって欲しくなかった。先ほど大学から、参考資料1のBSL-4 Reportを周辺自治会の全世

帯に配布するので参考にして欲しい旨の説明があったが、それは非常によいことだと思う。

(寺井委員) 興味深く拝見し色々な意見があって正直面白いと思う。施設に対する疑問について、26.7%の方が住宅密集地に造ることに疑問を感じると回答している。この協議会では、これまでほとんどの方が設置場所が問題だと主張されていると思っていたので、場所が4分の1、安全対策や危機管理が4分の1、緊急時の避難計画が4分の1、補償体制が4分の1となっていることの説明をしていただけないか。

(道津委員) 住民は、立地が一番の問題とずっと思っている。そして、着工してからは、施設の安全対策がどうなのかとか、危機管理はどうなっているのかがはっきり分からないということで選択が増えているのではないかと。私の自治会では班長会で、緊急時における住民の避難計画について、例えば防災無線は聞き取れないので防災ラジオを利用するように市に要望していることなどの報告をしている。アンケートは着工後に実施したものなので、施設の安全対策や危機管理等がまだはっきりしていないということで丸が増えているのではないかと。しかし、住民はなぜ坂本キャンパスに造るのかという疑問が根強くあり、一番の問題であるとずっと思っている。

(山下副議長) アンケートに関しては原委員と同じで、意見として聞くのはよいが、本協議会の場で取り扱うべきではないと思う。なお、この施設に対する疑問のところはグラフの評価自体の作り方が間違っているのではないかと。「何故坂本キャンパスに造るのか」は全体の回答数277のうち209なので約75%となり、逆に「ない」は17なので約6%になる。議論が錯綜しているようなので説明させていただいた。

(江頭委員) 9ページの「施設に期待していること」であるが、回答数379のうちの約70%以上の方が施設に期待しているという数字が出ている。反対が声高に言われているが、期待している人が7割もいるととらえてよいのではないかと。

(宮崎委員) アンケート結果を協議会で議論することはどうかというところはあるが、少なくとも坂本キャンパス内に施設を造ることに対する不安を地域住民の皆さんが持っていることは事実だし、リスクを明らかにし、ハード面やソフト面での対策をしっかりとし、その不安をいかに解消し、安全性を高めていくかという議論をずっと積み重ねてきた。今回出された意見は賛否両論あり不安な気持ちを出されているものもたくさんあり、これから先もますます不安が高まってくると思うので、大学としては重く受け止め、今後の情報公開の際の参考にしていただければと思う。

(神田委員) 先ほど山下副議長から、数の取り方やグラフがおかしいのではないかとという意見があったが、12ページ以降に分析を書いている。この質問は複数回答形式であったためグラフにするのが非常に難しいところがあった。微妙な違いはあるが、大まかな傾向としてはほとんど変わらない感じだったので、回答数でグラフを作成した。

(山下副議長) 回答者が277で、坂本キャンパスに造るのに疑問がある人が209であれば、そこに疑問を持っている人は8割ぐらいのはずが、このグラフでは27%ぐらいになっているので少ないのではないかと。言ったつもりである。

(調議長) 複数回答で、1人が丸を何個つけてもいいし、つけなくてもいいという中で、何%という個別の数字の付け方が間違っている。

(福崎委員) 大学がアンケートを取ることはずっと反対してきたが、今回のアンケートは面白いと思う。ここでどう取り扱うかは別にしても、宮崎委員が言ったとおりの期待と不安がきちんと出ている。アンケートの取り方や分析の仕方は間違っていると思う。そもそも質問用紙が付いておらず評価できないので、質問用紙は見せてもらわないといけない。アンケートは取る団体や人の価値観が質問内容に出てくるので、大学

がすべきではないし、住民側もすべきではないと思っていたが、今回は賛成、反対のアンケートではないというのがポイントで、それで面白い結果が出てきているのではないか。要望書や分析には、大学側がきちんと対応し検討すべき内容が入っているので、アンケートを協議会でどう取り扱うかという議論ではなく、大学側としてこれをどう考えるかをぜひ検討して欲しい。

(神田委員) 8ページの数字以外のところがアンケートの内容であるが、これが質問用紙ではない。

(福崎委員) 質問用紙の表現等が問題となる。

(調議長) 個人的な意見であるが、思った以上に期待もあり不安もあることが分かった。不安な内容については、今後、一つひとつに対応した取組を行う中でご理解を得られるようにしていきたい。ただ疑問はたくさんある。2自治会の会員数より多く配布されているようなので、2自治会以外にはどういう人に、何人に、どういうものを、誰の名前で配布したのか分からない。そうではあるが、今後の運営に生かしていきたい。

(高谷代理) 意見書は住民の手書きの意見を原文のまま書き写したもので、個別の意見についてうんぬんするのは真剣に答えてくれた人に対して失礼だと思う。

9ページの2の施設に期待していることのところ、アの薬やワクチンの開発が163人、技術者の育成が79人など施設に期待している人が多いのではないかという意見があったが、このアとイに丸を付けた人で、施設に対する何らかの疑問や不安や要望があるに丸をした人は約8割以上いたと思う。今回の新型コロナウイルスを受けて、こういう施設もなければいけないのかなという気持ちが生まれた半面で、ウイルスが漏れて事故が起きたらどうしようという不安を抱えている、それが人間だろうと思う。全部読んでいただければ分かると思うが、期待しているが、やはり不安や疑問や要望があるというのが今回のアンケートの全体的な流れだと自分は思う。

② 山下肇委員提出

(山下副議長) 2の長崎大学医学部のレベルについては、大学のアピールが下手すぎるのではないかという質問である。安田委員や森田委員や南保委員がたくさんテレビに出てアピールをしておけば、この先生たちの説明会だったら聞いてみようとなって、地域住民にももう少し情報が流れるのではないか。レベルという言葉は大変失礼だと分かった上で質問を出した。

次に4の地域連絡協議会の関連であるが、前回、参考資料として感染症共同研究拠点研究棟の建設計画の資料がいきなり配付された。協議会が半年開催されなかったこともあると思うが、だまし討ちみたいにして研究棟を造ろうとしていたのではないかと地域住民に見えても仕方がないと思う。しかも、資料には「実験棟の利用をより安全にかつ効果的に行えるよう」と書いてあり、これを素直に読めば、実験棟が不安な建物だったのでより安全にするための建物とも読めてしまう。安田委員からは、どちらかというとも安全性を確保するというよりも効率性を上げるためという説明であった。説明文が不十分な上に情報提供も遅い。新型コロナのせいで協議会が開催できなかったことは理解できるが、半年間、地域住民に対して情報提供がなかったというのはさすがにどうかと思って追加で質問した。大学の回答は予想どおりなので、個人的には追加しての回答は必要ない。

(調議長) 安田委員や森田委員などはどうしてテレビにあまり出ないのかというご指摘であるが、この人たちが今研究しないで誰が日本を救うのかということで個人的には

出ないなら出ないでいいのではないかと思っているが、長崎県医師会長である森崎委員はどう思われるか。

(森崎委員) 出る必要はないと思う。私が記者会見したのが全国に放送された時に、どこかの先生方が長崎だからできることと言われた。皆さんが長崎大学のレベルを別格と理解しているので出る必要はないと思う。

(安田委員) 日本感染症学会理事長の舘田先生や東北医科薬科大学の賀来先生など長崎大学医学部出身のそうそうたる先生方がテレビで解説等をされており、私が出る幕ではない。アウトリーチ活動やアピールはもちろん重要であり、特に地域のテレビ等には積極的に出るようにしていたが、今回は色々な事情があり研究に集中するために3月から7月まではメディアからの出演依頼を全て断ったというのが実情でありご理解いただきたい。

(森田委員) 今までは市民講演会等を開催して情報提供することができたが、今回の感染症はそういう場を設定できない。なるべくメディア等を通して情報を提供したいとは思っているが、全部のメディアに均等に対応するのはなかなか難しいので、先日は長崎大学リレー講座を YouTube で配信した。できるだけ情報は発信したいと思っている。

(調議長) 大学としても葛藤がある。彼らが研究しないとワクチンも治療薬もできない。

(藤原委員) 長崎大学医学部のレベルとはどういうことを言っているのかよく分からない。地域連絡協議会についての質問も、もう少し立ち入って教えて欲しい。

(山下副議長) 長崎大学が本当に感染症に関してトップレベルの大学だとしたら、もう少し全国版のテレビに出るのではないか。全国版のテレビに出ないということは長崎大学のレベルが低いのではないかと喧嘩を売れば面白い回答が出てくると思って質問したら、素直な回答が出てきたということで言葉が過ぎているのは分かっての質問である。

4については、仮にBSL-4施設で何かの感染が発生した場合、この協議会は開催されず今回と同じように住民に情報が流れなくなるのではないか。平常時に情報が流れる必要はあまりないが、施設で事故が起きるなど緊急時に情報が流れないのはよくない。今回は施設を造っている途中なので仕方ないとは思いつつも、今後は緊急時においても住民に情報が流れる状態を作って欲しいと、前回研究棟の話が出たので関連して質問したものである。

(藤原委員) 長崎大学医学部のレベルは高いと思う。コロナの発生件数が長崎でも非常に多くなってきたが、医療機関、県、大学等の対応が県民に全然伝わってこない。もう少し県民に分かりやすく状況を伝えてもらわないといけないのではないか。前回、県内の医療機関は大丈夫であると説明があったが、みなとメディカルセンターの感染は依然として続いており、信用できず非常に残念である。もう少し緊張感を持って欲しい。

(泉川委員) この感染症は今までのものとは違い症状がなくてもウイルスを持ち、それを人にうつす可能性があるということで極めて対策は難しいと言わざるを得ない。医療機関には必然的に患者が集まってくるので、網の目を通り抜けて感染している方が入ってくる率が高く、当然感染のリスクも高くなる。大学病院とみなとメディカルセンターは共倒れになる直前であった。全ての患者をチェックするのは非常に難しい側面もあり、今は院内での感染リスクをいかに減らすかというところにシフトしてきており、この感染症は基本的にゼロにすることはできないと個人的には思っている。

100と0という考え方だと、感染症対策はちょっと立ち行かない。

患者の治療をするのが我々の仕事であり、情報の出し方については同じような意見を持っている。行政からもう少し詳細な情報を出すべきということもあるが、個人情報や人権の保護という面もあり、非常に中途半端な状況になっている。今はだんだん感染者が減ってきておりピークは越えたのではないかと思っているが予断は許さない。我々としても常に緊張感を持って対応しているが、どうしてもすり抜けてくることがあるということをご理解いただきたい。

医療従事者は感染するかもしれないといったストレスの中で仕事をしている。人間は100%ではないのでエラーが起り得る。BSL-4施設とも関係するが、リスクゼロということはありませんので、どれだけリスクをゼロに持っていくかというところをやっているかといけないと思う。

以上、コロナの難しさについてご理解をいただければと思う。もちろん住民にご迷惑をかけないように大学病院はじめ、長崎県、長崎市、県内の全医療機関が色々手を尽くして頑張っているところである。

(道津委員) 前回の協議会でも発言したが、今回の新型コロナに関しては、感染を防止するのは確かに非常に難しいというのは先生の言うとおりでと思うし、ご尽力されていることも分かっている。しかしながら大学病院の実習生の陽性が確認され、その接触者で当初PCR検査で陰性であった大学病院の指導医が2週間の自宅待機期間中に歯医者に行ったということで、そこが問題である。大学病院とみなとメディカルセンターとで感染制御を行い市中の患者を守らなければならないという状況の中で、医療従事者に対してどのような教育をしているのか。これはBSL-4施設にも関わってくることで、施設の中で何か漏れた可能性がある場合など、患者として病院に行くことになると思うが、その対応策として自宅待機となった場合にそういうことをされるとまた同じようなことが起きてしまう。大学病院としてはどういう教育をしているのか聞きたい。医師としてはそういうことをしてはいけないだろうと思った。

(泉川委員) この医療従事者が歯科を受診したことは非常に残念に思う。反省しかない。組織としてもまさかというところがあり、その後はそういうことがないように指導を徹底している。

(高谷代理) 先ほどアンケートの件で質疑応答があったが、要望書に関する議論が行われないまま次の議題に入っており、聞きたいことがあったのにおかしいのではないかと。

(調議長) 要望書に対する回答は資料に書いてある。この後はビデオを見てもらう予定にしており、今日のところは時間がないので、改めて質問を提出していただいて次回議論することにした。

(高谷代理) 簡単に一つだけ。4ページの2の「計画をゼロベースで見直し、立地を変更する」といったことが現実的でないとすれば、長崎大学は、少なくとも今回私たちが提言した要望事項について、これから十分な検討、議論を行い、その結果を住民に示していただきたいとします。このことが大学と住民のよい関係を作り、まさに合意形成をすることだと考える。完成までに時間がなく、その後の稼働までのスケジュールが分からないが、今回の4つの要望事項に関しては真摯に対応することになるので、協議会又は別の部会で毎回住民と議論を行って欲しい。アンケートうんぬんはここで議論することではないと思うが、この4つの要望事項は非常に大事なものであり住民として安心を得るための最低限のことだと思うので、今後の協議会又は別の場において、施設が完成して稼働するまでには必ず結論を出して欲しい。次回までに

工程表、スケジュールを作成し、その上で議論を進めて欲しい。

(調議長) 先ほど神田委員の質問に対して協議の方法を検討することにしたので、改めて工程表というのはなじまないのではないか。

(高谷代理) 物事はゴールを決めた上で、いついつまでに何をするか計画立てて進めていくのが仕事の基本であり、その計画を作って欲しいということである。

(調議長) ご意見としては承った。今後の方針について次回お話ししたい。

(安田委員) 研究棟の建設計画についての質問に関しては、安全のためにと言い過ぎたために誤解を招いた部分があるようなので微修正させて欲しい。あくまでも感染症共同研究拠点の人員と機能を集約して、利便性を上げ、効率よく成果を上げるための建物である。情報提供の方法等に関しては、今後さらによい方法を検討していきたい。

(2) 安全管理に関する検討状況について

議長から、第28回の協議会でアメリカ国立衛生研究所（N I H）が作成したスーツトレーニングのビデオのうち「BSL-4実験室への入退室編」を紹介したが、今回は「BSL-4実験室での作業編」を紹介すること、当該ビデオは感染症共同研究拠点内部に限り利用可能という特別な許諾を得たものであり撮影等を禁止することの説明があり、ビデオを視聴後、若干の質疑応答が行われた。質疑応答の大略は次のとおり。

(道津委員) 不正をしないようお互い監視し合うために2人1組で実験するということがあったが、実験者の後ろでもう1人が監視するのか、それとも同時にあそこに座って監視するのか。

(中嶋委員) 実験の種類によって色々あるかと思う。お互いが分かるように隣に座る場合もあるかもしれないし、そこは適宜ということになると思う。

(安田委員) 2人一緒に入って相互監視するという役割もあり、一つの作業を2人でやることもあるし、1人が作業して1人が見ているということもある。今回のビデオでは多分1人が作業して、もう1人がビデオを撮影していたのではないかと思う。

(3) その他

事務局から、次回は10月14日を予定しており、改めて開催案内を送付する旨の説明があった。

— 以 上 —